或午後の風景

たるんだ電線の上を小さな子供が歩いてゆく
空はぼんやりとしてけだるく流れ
それをはるかに渡ってゆく白馬

僕は部屋の中だ、頬づえ突いて
重々しい夏の風景は閉ざされた原風景に似て
何も語らずに、ただ見えるだけ

僕は詩人ではない
だからその向こうを見ることは出来ない
ただ「在る」ということだけが感じられるだけだ

風が吹いていないのに木が揺れ、ざわめく

暑さにしなう幹を、地が顔を引いて避ける

誰も僕の目の前から立ち去らず
今だ、在る・・・ただ、在る・・・
全ては自分のことに手一杯で
そして、あくまで孤独に歩く
（歩け・・・、歩け・・・）

(1982.6.21)